

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

8月 1日 今日の通読箇所 コロサイ人への手紙 3：12～17

「キリスト者の着物」

パウロは、8, 9節で古い着物について書いた後、新しくされたクリスチャンが着るべき着物を記しています。12節には新しい人の魅力的な衣類として、あわれみの心、慈愛、謙遜の下着と、柔和、寛容、忍耐、赦し合いの上着を記しています。また14節には「愛を身に着けなさい」(新改訳)と勧めています。なぜなら神の愛こそ「すべてを完全に結ぶ帯」で、永遠的な価値あるものだからです。最後に15節には「キリストの平和と感謝の心」を身に着けるように勧めています。これらはクリスチャンの身につける着物で、私たちがいつも着ていると、神の栄光を現せるのです。

8月 2日 今日の通読箇所 コロサイ人への手紙 3：18～4：1

「主への畏敬」

夫と妻、両親と子供、特に主人と僕の関係が語られています。ローマ帝国社会は奴隷制で成り立ち、奴隷は私財を持たず主人の私有物でした。病気になれば捨てられ死を待つばかりでした。この社会形態で奴隷解放を行うなら、彼等が職と生活の場を失うことは目に見えていました。パウロは彼等に「どのような社会、境遇でも、主への畏敬の故に地上の主人に真心から仕えなさい。あなたがたが本当に仕えている方はキリストだからです。真の報いは人でなく、主からであることを心に留めていなさい。」主人には「彼等を人格ある存在として正しく公平に扱いなさい。全てをご存知で正しくお裁きになる主人が天に居られるからです」と教えています。聖書の教えによりやがて奴隷解放が実現したのは、歴史が証言しているところです。

8月 3日 今日の通読箇所 コロサイ人への手紙 4：2～6

「祈りと証」

パウロは、家庭の交わりから教会の交わりについて記します。「教会」という語は「呼び出された者の集まり」という意味があります。パウロは、この手紙を読む人が「目を覚まして祈り」、「賢く行動するよう」に勧めています。毎日の祈りと御言葉を読む時も眠気の催す時間ではなく、自分の最も良い時にする心がけが大事です。また御言葉を伝える機会が与えられた時、語るべきことを明快に語るために、どうしても必要なのは背後のとりなしの祈りです。教会の外部の人に対しては、時が良くても悪くても、機会を生かし、福音を大胆に語ることです。しかし、粗野にならず、押しつけがましく語らないように気をつけなければなりません。ですから親切で塩味のきいた会話が求められているのです。

8月 4日 今日の通読箇所 コロサイ人への手紙 4：7～12

「オネシモとマルコ」

ここにはエパfrasも含めて六名が挙げられています。そのうちのオネシモとマルコ。オネシモは、主人ピレモンに何らかの不都合を及ぼしたようです。彼は大都市ローマへ逃れた奴隷。そこでパウロに出会ったのです。パウロの祈りと導きを受け悔い改め、救いに与り、今パウロは彼を「忠実な愛する兄弟」と呼んでいます。オネシモはパウロから「ピレモンへの手紙」を託され主人のもとに帰ることになりました。バルナバのいとこマルコ。彼はパウロとバルナバの「第一次伝道旅行」に同行し、途中で引き返してしまった青年です。バルナバの導きと助けによって、やがてパウロにとって有用な人物となりました。パウロは「同労者、わたしの慰めとなった者」と言っています。彼は「マルコによる福音書」の執筆者でもあります。

8月 5日 今日の通読箇所 コロサイ人への手紙 4：12～18

「祝福を祈るパウロ」

パウロは自ら力づけた同労者を6人あげています。そのうち3人はユダヤ人で、他の3人は異邦人です。12節からは異邦人のエパfras、医者ルカ、デマスが記されています。エパfrasは祈りの人で、彼の祈りはキリストのゲッセマネの祈りを思い起こさせた程、熱心・真実でした。医者ルカは、最後まで獄中のパウロのそばに付き添っていた主治医です。ルカの存在はパウロにとってどんなにか心強かったに違いありません。デマスは後に、この世を愛し、キリストから離れてしまった背教者です。彼の生き方は私たちへの警告です。こうして獄中のパウロは、鎖に繋がれた手で署名をし、「恵みがあなたがたと共にあるように」と祝福を祈ったのです。

8月 6日 今日の通読箇所 列王紀上 12章1～11

ソロモン王が死ぬと、王子レハベアムは、そのあとを嗣いで王となるべく、シケムに行った。そこには国民の代表(ことにエフライムを中心とした北方諸族の)が集まって、レハベアム王の即位を承認し、忠誠を誓うはずだった。しかるにヤラベアムの扇動によって、人々はその条件として、王に対して「税金、労役、軍務その他、重すぎる国民の負担を軽減するように」という交渉をはじめたのである。驚いたレハベアムは、即座の決定を延期して家臣にはかるのだが、そもそも彼は王宮をただ楽しみの場として、ソロモン王の繁栄に甘えて育てられたので、責任感も、事態を推察する能力もなく、もともと軽薄な人物だったのだ。

8月 7日 今日の通読箇所 列王紀上 12章12～24

レハベアムは慎重な老人の提言をしりぞけ、軽薄な同年輩の取り巻きどもにけしか

けられ、強圧的な態度で国民にのぞんだ。その結果、エフライムを中心とした北方十支族は分裂し、ヤラベアムを王としてイスラエル王国を立てた。一方、ユダヤとベニヤミン族は結束して、ダビデの王家を支持し、ユダ王国と称し、レハベアムがその王となったのである。いわゆる王国分裂時代を迎えることとなった。立場の違う人々を理解する寛容。物ごとにやわらかく対応する柔和。王者に必要なこれらの人徳が、レハベアムに欠如していた結果だ。

8月 8日 今日の通読箇所 列王紀上 12章25～33

今や北方イスラエル王国の王となったヤラベアムは考えた。「国は二つに分かれたが、依然として国民の宗教と礼拝の中心は、南方ユダの都エルサレムの神殿にある。わが北方イスラエル王国の民が、今後もつづいて、礼拝のためにエルサレムに行くのは、人心統制のためには、政策上まことに面白くない」そこで北はダン、南はベテルに勝手に神殿を立て、金の子牛を置き、祭司制度から礼拝の期日まで、みな聖書に根拠なき独特の規定を作って、ここで国民に礼拝を守らせ、人々のエルサレム行きを禁止した。結局ヤラベアムは最初から、預言者アヒヤの勧告を無視したのだ。

8月 9日 今日の通読箇所 列王紀上 13章1～34

ヤラベアムが国を分裂させ、北方イスラエル王国を建ててその王となるのは、主がお許しになったことで、それはさきに預言者アヒヤを通して、ヤラベアムにお告げになった通りであった。同時に神はアヒヤによって彼に、あくまでも聖書の教えを守り、聖書の教えにもとずいて国を指導し統治しなければならないことをお命じになったのであって、これはヤラベアム王に課せられた当然の義務だったのである。しかし、必死のアヒヤの忠告もむなしく、ヤラベアムは現実的政策を優先し、神の戒めを破り、結局アヒヤ自身をも退けてしまった。今神は一人の無名の預言者を送って、最後のきびしい警告をお与えになったが、ヤラベアムの強情はその滅亡まで続くのである。

8月10日 今日の通読箇所 列王紀上 14章1～20

王として、政治家としては高姿勢のヤラベアムも、わが子の病気には弱気になって、長いごぶさたで今さら行けた義理ではない預言者アヒヤのところへ、変装した妻をやって、子供のために祈りを求めさせた。その時アヒヤは語った。「この子はヤラベアムの宮廷にありながら、不思議に不信仰な父親を見ならわず、真の神に対して、よい心とよい態度を全うしていた。それ故、さし迫っている、ヤラベアム家の恐ろしい裁きと滅亡を見ぬように、今のうちに天に召されるのが、むしろ神の恵みだ」とそう語ったのである。

8月11日 今日の通読箇所 列王紀上 14章21～31

一方南王国ユダの方でも、軽薄なレハベアム王のもとに、宗教的にも道徳的にも、混乱、墮落が進み、増加してきた偶像の神殿には、神殿男娼があふれるに至ったと

いうから、一国の状況も察せられるというものである。今エジプト王がユダに侵入略奪したのはようやく独立した北方イスラエルを、側面から応援するという目的もあるが、ユダの衰微の結果であることは言うまでもない。奪われた金の盾のかわりに、今度は青銅の盾で間に合わせなければならなくなったのもなさないが、ユダ王国自体の価値の低下の方がもっと悲惨だ。

8月12日 今日に通読箇所 列王紀上 15章1～30

大体のことを言えば、ヤラベアムの反逆によって建てられた北方イスラエル王国は、南方ユダ王国にくらべて墮落、混乱がひどかった。その結果、滅亡に至るまでの約200年の間に、革命が起り王が殺され、王朝のあらたまること5回、その間王位についた者は19人で、平均在位はわずか10年という有様であった。ユダ王国の方は、一応ダビデ王の王系が最後まで継続し、敬虔な王も多く出た。ここに見えるアサ王はその一人である。次にイスラエル王国に出現するバアシャという人物は、この王国最初の革命家だ。

8月13日 今日に通読箇所 列王紀上 16章1～20

バアシャは革命によって、ヤラベアム王を倒し、その一族を皆殺しにしたが、これはアヒヤによる預言の通りであった。バアシャの革命は一応成功し、彼はイスラエル王となったのだが、バアシャの子エラ王に対して、はやくも戦車隊長ジムリのクーデターがあり、ジムリは酒宴中のエラ王をおそい、またその一族を皆殺しにした。これは預言者エヒウがバアシャに対して警告、預言した通りであった。しかるにジムリは7日天下で、丁度ペリシテとの戦争のため出陣中だった軍隊は、ジムリのクーデターを承認せず、将軍オムリを立ててジムリを攻撃し、ジムリは宮殿の火中に死んだ。本当に「剣によって立つものは、剣によって亡びる」というみことばの通りである。

8月14日 今日に通読箇所 列王紀上 16章21～34

ジムリのクーデターを承認せずに立ち上がったのは、将軍オムリだけではない。オムリはジムリを殺したあと、別の勢力家テブニと戦わなければならなかった。流血の内戦数年にして、ようやく王位はオムリの手に戻したが、これは名前の如く「相当オムリを通したやり方」と言わなければならない。彼の子が、イスラエル史上最悪の王アハブである。アハブは、王としては、政治的にも軍事的にも、なかなか手腕のある優秀な人物であったが、北方の大国シドンの王女で、熱心なバアル礼拝の信奉者イゼベルとの結婚が、彼の悪事のキッカケ、決定的出発となったのである。

8月15日 今日に通読箇所 列王紀上 17章1～16

「もしイスラエルが罪を犯して神にそむき、悔い改めない時は、神は祝福を止め、天はとざされて雨は降らず、地は乾燥して作物を生ぜず、かくして神は人々に反省

と悔い改めを求めるであろう」とは、昔から与えられた神のご警告であった。今、アハブとイゼベルが、国王の権力を濫用し、イスラエル国民に、真の神を棄て、バアルを礼拝するように強制し、従わざる者は処罰する、という事態に立ち至った時、預言者エリヤは、さきに示された神のご警告があらわれるよう、祈らざるを得なかった。やがてエリヤは、この言葉をもってアハブ王を警告したが、その言葉の通り、国中は飢渴に苦しむこととなった。怒ったアハブ王は必死にエリヤを捜索させたが、この間神は奇跡をもってエリヤを守り、また神に従う、ザレパテの貧しい未亡人をも、守って下さったのである。

8月16日 今日の通読箇所 列王紀上 18章1～16

イゼベルとアハブは、イスラエルに対して、バアル礼拝を強制した。しかも、それを拒否してあくまで真の神に従う者に対しては、組織的迫害を加えた。しかしそれにもかかわらず頑張る人があり、またイゼベルにかくれてひそかに彼らを保護する有力者があったことなども記されている。エリヤの宣告どおり、干天と飢饉が3年も続く間に、人々の中に反省が生じ、イゼベルとバアル礼拝に対する抵抗の空気は強くなって来たと思うが、さて命がけでその先頭に立つ冒険者がいない。そこで、今までかくれていたエリヤの出番となったのだ。

8月17日 今日の通読箇所 列王紀上 18章17～29

いよいよ有名なカルメル山上、450人のバアル預言者(彼らはイゼベルを通して国費から給付を受けていた)と、たった一人のエリヤとの対決の場面となった。イスラエル大体の空気を言えば、アハブ王をも含めて、すでに充分反省の気運がありながら、まだ決断をためらう「つまり二つの間に迷う」状態であった。神様はこの時において、エリヤの祈りに答え、明確な奇跡によって人々にご自身の力と栄光を示し決断をうながし、信仰を助けようとされたのである。しかし勿論、このような、ショウ的な奇跡は、どうしてもそれが必要な時機に応じて示される特別のものであって、平常の時に、つねに期待すべきものではない。

8月18日 今日の通読箇所 列王紀上 18章36～46

神がエリヤの祈りに、火をもって答え給うた奇跡によって、アハブ王もイスラエルも、今や驚き目覚めて立ち上るに至った。バアルの預言者は処刑され、祝福の雨は滝のように降って来た。緊張と興奮で真っ青になったアハブ王の、駆り立てる馬車は、豪雨の中をまっしぐらにエズレルの宮殿に向う。エリヤも濡れねずみになってその先き駆けをする。これからすぐに、アハブはイゼベルを処分するはずである。そして悔い改めた国王アハブと、その預言者エリヤは協力一致、イスラエルの宗教改革に着手、という場面にならなければならないのだが……。

8月19日 今日の通読箇所 列王紀上 19章1～8

イゼベルはアハブの妻だから、とにかく夫のアハブが、まずイゼベルの処置をしなければならぬ。しかるにいつも意志が弱く、気まぐれなアハブは、昨日の感激はどこへやら、一晩のうちに妖婦イゼベルの手れん手くだにまるめこまれてしまって、翌日は城から出て来ない。祈りつつ待っていたエリヤのところへは、反対にイゼベルの脅迫が届いた。「殺された 450 人のバアルの預言者の復讐」を誓った脅迫であった。多年の苦心が水の泡となって、さすがのエリヤも、その失望落胆は深刻である。神に対し、人間に対する不信絶望から、自分の死を祈ったのもむりはない。もし未信者だったら自殺するところだ。それにしてもそういうエリヤに対して与えられた、神のねんごろな介抱はありがたい。

8月20日 今日に通読箇所 列王紀上 19章9～21

エリヤはもともと意志が強く、気力にあふれ、王様でも群衆でも向うにまわしてビクともしない。一気にものごとをやりとげるタイプだ。しかし同時に長所は短所で、問題のニュアンスによってきめ細く対応するとか、変化に応じて柔軟に根気よく対処するなどには苦手だ。また自然「我こそは」という気負いを持ちやすいのも事実だ。神はいまこの山で、はげしい地震や火の中でなく、静かな細いみ声でエリヤに語りかけ、また神に対して心を全うしているのは、決して英雄エリヤ一人ではなく、無名にしてなお神に忠信をつくす、7千人がいることを教え給うた。つまり忍耐と大勢の協力によって、息の長い奉仕と戦いを続けなければならないのである。そして今、弟子としてエリシャを立てることが命じられた。

8月21日 今日に通読箇所 列王紀上 20章1～21

アハブ王は駄々っ子であり、悪王でもあるが、戦争の場面などになると、意外に男っぽい所を見せる。スリヤの王が戦争をしかけて、アハブ王の個人的財産を要求した時は、国中が戦乱にまきこまれるよりは良いと考えて、その要求をのんだ。しかし凶に乗ったスリヤ王が、家来や国民に対する自由な掠奪を要求して来るに及んで、断固これを拒絶して抗戦に踏み切ったのである。それ故この戦争には神の助け、国民の一致協力があって、勝利に導かれたのは幸いであった。何といたってもエリヤの奉仕の結果、イゼベルの影響力は衰えた。アハブ王と国民の中に、新しい気運は進んで来た。この勝利もその結果の一つと思われる。

8月22日 今日に通読箇所 列王紀上 20章22～34

イスラエルに負けたスリヤは、いわゆる再軍備をととのえた。今まで地方ごとに権力を持っていた王たちを止めさせ、かわりにスリヤの総督をおいて、中央集権、挙国体制を固め、前の戦争で失われた軍隊、軍備を大至急ムリヤリに補給した。そして今度は山岳地帯の戦争を避けて、逆にイスラエル軍を平地に引っ張り出して戦おうという作戦を立てて、翌年また改めて来たのである。その言い分は面白い。「イスラエルの神は山の神だから、山地では彼らの方が有利だったのだ。今度は平地で戦ってみよう」と言うのであった。しかし今度も神の助けによって勝利はイスラエルに帰した。しかしアハブ王がいろいろ機嫌で、おだてにのって敵の王を許し、簡単

に和睦をうけ入れ、自由貿易のような友好関係を結ぶ結果で終わったのは、いかにも軽率でお人よしすぎる話だと思われる。

8月23日 今日の通読箇所 列王紀上 20章35～43

アハブ王が戦争に勝って気をよくし、おだてに乗ってオッチョコチョイな態度を取ったので、スリヤ王は生きのび、戦勝の効果は半減だった。このことを警告するために、一人の預言者が取った方法は「物のたとえ」などを通りこして「実行によるイラスト」とも言うべきものであって、預言者の奮然たる気持も察しられる。「あちらこちらと忙しくしていたので」大切なあずかり物を失ってしまうようなケースは、我々にもある。アハブ王もまた、余計なことに気を取られて、シリヤに再起不能のダメージを与えるチャンスを逃してしまったのだ。キリストもマルタに「無くてならぬものは多くはない。ただ一つだ」と教えられた。我々も、どうしても良いことは整理して、一番大切なこと、最も中心的な責任奉仕に、集中して生きたいものだ。

8月24日 今日の通読箇所 列王紀上 21章1～14

アハブは能力、勇気など、王者の資質もないわけではないが、気まぐれでわがままで、まずバカ王の典型だ。イゼベルがこのアハブを愛すること母親の如く、アハブの彼女に甘えること赤児の如し。今、ナボテとの紛争で、アハブのわがままを通してやろうと、イゼベルの実行した方法は、賢明にして冷酷、国民の人権や幸福はあるか、その生命に対してすら不思議な無頓着を示して、実に悪女の典型だ。アハブは彼女がこれだけのことをするのを、見て見ぬふりをしていて、結果が自分のわがまま通りになるのをアテにしている。本当に仕方のない、最低の奴らだ。

8月25日 今日の通読箇所 列王紀上 21章15～29

アハブはイゼベルの奸策によって不当に獲得したナボテのぶどう畑を喜んで見に行った。しかし、そこで預言者エリヤを通して神様の叱責を受けたのである。アハブは敵に対しては勇ましくイゼベルに対しては甘える。しかしいつもエリヤに対しては恐れていた。今アハブは、エリヤから、神の裁きの宣告を聞くや、手のひらを返すように恐縮し、衣を裂き断食をし、ひたすら神にゆるしを求めた。打ちしおれて静かに生活するありさまは、誰の目にも明らかであった。神はその謙遜謹慎の様子を見て裁きの執行を猶予して下さったのである。ここにアハブの悪事は大体において「その妻イゼベルがそそのかしたのだ」とあるが、私などは正直言って「何ともはや」という感じだ。

8月26日 今日の通読箇所 列王紀上 22章1～14

エリヤによる宗教改革は、あのときエリヤが感じた程全面失敗に終わったわけではない。何と云っても、もう、イゼベルが主の預言者を殺すようなことはできなくなり、今は宮廷においても、多くの主の預言者が奉仕している様子が見えるのである。しかし、むずかしいのは本質的な、内部的な宗教改革である。むらがる主の預言者も、おべんちゃらを言って王に取り入ろうとする連中が多いのは情けない。しかしその中で、ミカヤのみは一人真実を語り、主のみ心を告げよし仲間外れにされても、王に憎まれ退けられても、孤高独善、そのすじを曲げなかった。

8月27日 今日の通読箇所 列王紀上 22章15～28

ユダの王ヨシャパテは、もともと敬虔な王であるが、今スリヤと戦おうとするにのぞんで、スリヤを共同の敵とする、イスラエルの王アハブと軍事連合、共同作戦を持とうとしたのである。しかし、アハブがかくれもない悪王なので、不安躊躇を感じ、そこで預言者を通して神のみ心を知ろうとしたのだが、彼が真の神のみ声を聞いたのは、大勢のへつらい預言者でなく、ただ一人、ミカヤの口を通してであった。悪魔が人を滅びに誘おうとする時に「いつわりを言う霊となって預言者の口に宿る」というのは、きびしい警戒の教えである。

8月28日 今日の通読箇所 列王紀上 22章29～40

アハブは大勢のへつらい預言者の言葉を気休めにしていたが、内心では、エリヤやミカヤの言が本当だと感じているから、今度の戦争では、神様が自分に裁きをお与えになるかも知れないと恐れた。そこで一将校の姿に変身して、敵の注意をそらし、集中攻撃を避けようとたくらんだのである。ところが王の姿のまま戦場にのぞんだヨシャパテの方は、神に守られて、かえって無事だったのにアハブは流れ矢に当たって負傷し、流れ出す血で戦車を血の池のようにして死んだ。かくてエリヤの預言は成就し、神の裁きは執行されたのである。「神の『ひき臼』はゆるやかにまわるが、すべての物を砕き、神の『あみの目』は大きいが、すべての物を取る」というのは本当だ。

8月29日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 1：1～7

「信仰、希望、愛」

パウロたちは、ピリピ伝道の後テサロニケに向かいました。ここはマケドニヤ(今のギリシャ北部)の首都で最も人口の多い中心地でした。パウロは会堂で約三週間福音を語りその結果、幾人かのユダヤ人と多数のギリシャ人や貴婦人たちがパウロたちに従いました。しかし多くのユダヤ人はこれを妬み、混乱と迫害が起こったのです。パウロたちはテサロニケに留まることが出来ずベレヤに向かいました。アテネ伝道の後、コリント伝道を開始したパウロは、ここからテサロニケ教会に手紙を送ったと言われています。3節。主にある働きは「信仰」によって引き起こされます。「愛」に鼓舞され、骨惜しみしない労苦を喜び、やがてキリストにお会いする「望み」に励まされ、彼らは前進していました。

8月30日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 1：6～10

「偶像を捨てて」

テサロニケに伝道したパウロは、ユダヤ人の迫害によってこの町を離れなければなりません。しかし、そこで生まれたクリスチャンたちが、サタンの誘惑と困難と迫害に耐えられるかどうか、心配でたまらなかったのです。それでパウロは、彼らに対する励ましとその様子を知るために愛弟子のテモテをテサロニケへ遣わしたのです。テモテの報告は、彼らが福音に堅く立ち、彼らが伝えるみことばと信仰とは、雷鳴のように響き渡り、周囲のギリシャの町々に広まっているということでした。そして、それほど評判になっていた彼らの信仰の中でも、特に際立っていたのは、彼らが「偶像を捨てて神に立ち返り、生けるまことの神に仕える」(9節)

ようになったことでした。きっぱりした偶像との決別が、彼らの信仰を堅固なものにし、多くの祝福の実を結ぶに至らせたのです。

8月31日 今日を通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 2：1～8
「神の福音」

パウロとシルワノ（シラス）はピリピで福音を語った為に、公衆の面前で何度も鞭打たれ足かせをかけられ投獄されました。二人ともローマ市民権があったにもかかわらず正しい裁判にもかけられなかったのです。解放後、パウロたちは神の力によって勇気を奮い起こし、今度はテサロニケに向かい福音を語り続けました。テサロニケでも同胞ユダヤ人から激しい迫害を受けた為、救われたばかりのクリスチャンたちを残してベレヤに逃れざるを得ませんでした。このユダヤ人たちはベレヤにまで押しかけて群衆を扇動し再び騒ぎを起こしたのです。パウロは言います。「私たちは福音を神から託されたので、人に喜ばれるためでなく、神に喜ばれるように語るのである。」テサロニケを訪れたことは無駄ではなかった。彼らは聖霊による喜びをもって御言を受け入れ、偶像を離れ、生ける真の神様に立ち返ったのですから。